

奄美沖繩地域のケーススタディと通史

蛸原一平@奄美沖繩班

- ・奄美沖繩班での年表作成の作業について
- ・ケーススタディと通史(の予想図)

作業状況

◎収集データ

人口、聞き書き、関係のある統計資料(例えばジュゴンの捕獲量)
→各自の研究内容から拾っていく

◎奄美沖縄班のメンバー

古代のヤコウガイ捕獲史(木下)ー6～8世紀、海産資源

蔡温の資源管理政策(三輪)ー18世紀、林産資源

ソテツのたどった道(安溪貴子)ー近世～近代、農産物

物々交換が結ぶ島々(安溪遊地)ー近世～近代、林産資源その他

ジュゴンの乱獲と絶滅の歴史(当山)ー明治期～大正期、海産資源

明治大正期の奄美沖縄の統計書を読む(早石)ー明治～大正、農産

サンゴ礁の環境認識と資源利用(渡久地)ー明治～現代、水産資源

西表島のイノシシ猟にみる陸産資源の持続的利用(蛸原)

ー大正～現代、陸産動物資源

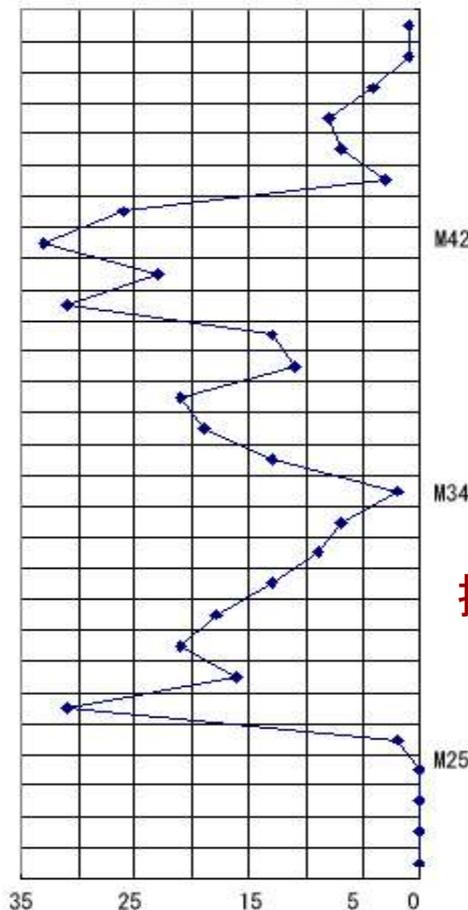
沖縄に里山はあるの?(盛口)

ー大正～現代、農産物、林産資源

年表作成用の試作ファイル(ジュゴンの例)

年代	中国元号	日本元号	琉球国王	周辺地域史	奄美・沖縄通史	自然災害・気候	奄美諸島			沖縄			
							人口	自然環境	生活(生業・産業)	思想制度	思想制度	生活(生業・産業)	自然環境
1925		大正14		八重山地方で蓬莱米移植			223733						557622
1924		大正13					207352						
1923													
1922		大正11					222733						
1921													
1920		大正9											
1919		大正8年											
1918		大正7											
1917													
1916		大正5											
1915													
1914		大正3		第一次世界大戦									
1913													
1912													
1911		明治44											
1910		明治43											
1909		明治42											
1908		明治41											
1907		明治40											
1906		明治39											
1905		明治38											
1904		明治37											
1903		明治36		人頭税廃止	鳥島住								475932
1902		明治35		南大東島入植開始									471145
1901		明治34		玉置半右衛門、八丈島な									467378
1900		明治33		与論よ									465470
1899		明治32											
1898		明治31											
1897		明治30											
1896		明治30											
1895		明治28		中川虎之助、八重山糖業									
1894		明治27		日清戦争									
1893		明治26		中川虎之助ら、石垣の官									
1892													
1891		明治24		八重山開墾規則制定									
1890		明治23											
1889													
1888		明治21											
1887		明治20		八重山に甘蔗苗62万余配									374698
1886		明治19											
1885		明治18											
1884		明治17											

沖縄県全体での捕獲頭数



地域個体群の絶滅

保護の必要性が指摘される

571572

捕獲実績なくなる

急激な減少、小型化

再びピーク

報告捕獲頭数の減少

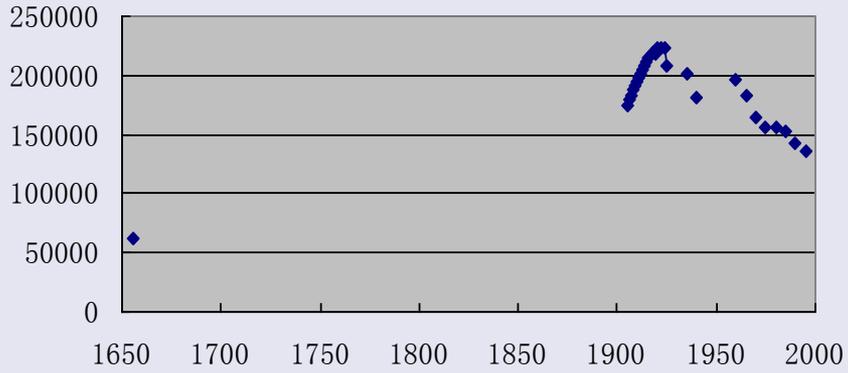
捕獲効率の低下、低価格化?

報告捕獲頭数のピーク

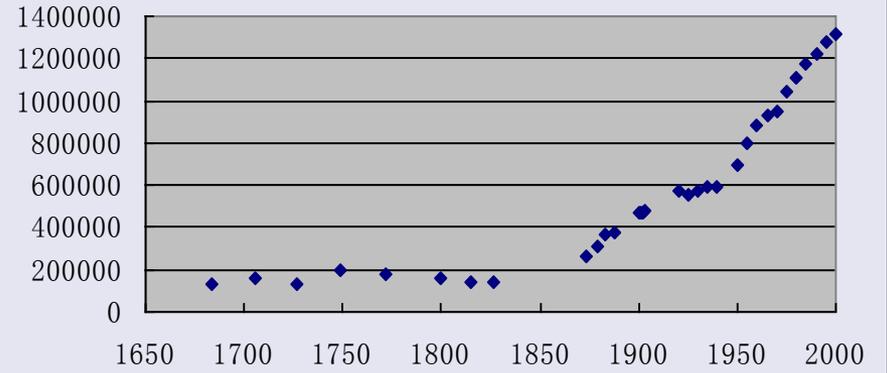
ジュゴン商取引の開始

奄美沖繩の人口動態

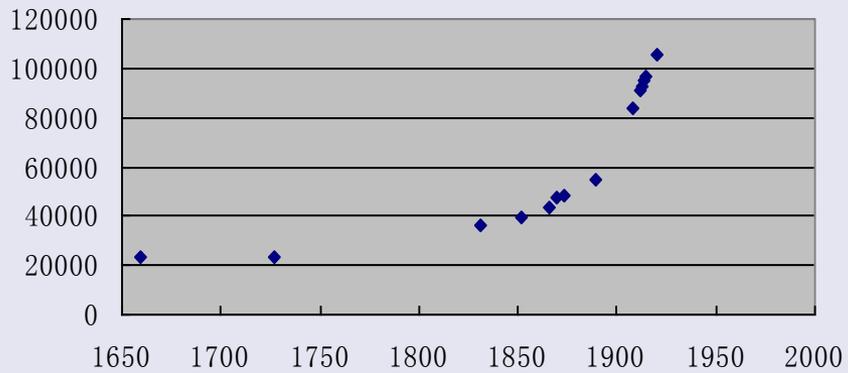
奄美群島



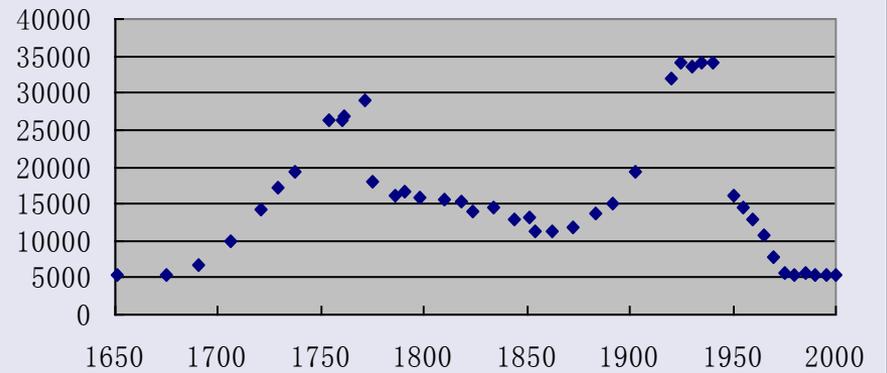
沖縄全体



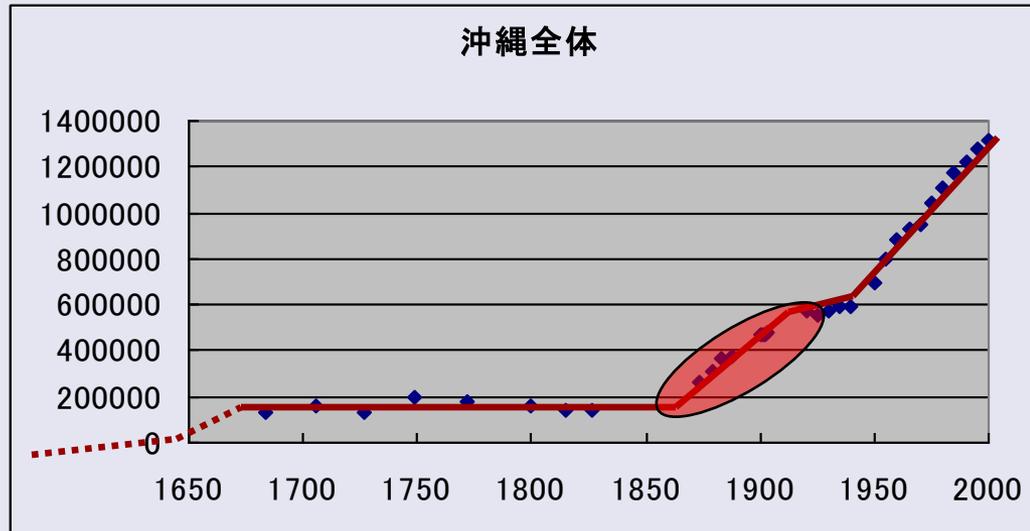
奄美大島



八重山



沖縄の人口動態パターン



階段式の増加

2度の急激な増加期

(-近世? 1600年～1700年初頭、約2倍)

-近代1850～1930年頃まで、約3倍

→人の移入移出、技術導入→大きな生業変容

-戦後以降、約2倍

→都市への集中、外部(圏外)経済に大きく依拠

近世末までの自然利用

人口が少なかったので資源を枯渇することはなかったのか？

◎弥生～平安並行期前半頃にフード・ストレス？（高宮説）
縄文時代後期から弥生～平安並行期に進むにつれ、
硬骨魚綱の遺体出土が減り、哺乳綱や爬虫綱などの割合が高くなる

◎6～8世紀のヤコウガイの乱獲（木下）

奄美大島北部でヤコウガイが大量に出土する遺跡

ヤコウガイ・・食用→貝殻の一部を唐？と交易（螺鈿素材）

- 1) あらゆる大きさのヤコウガイを捕獲、持ち込み
- 2) 大型の捕獲、持ち込み
- 3) 大型、中型の貝が捕れなくなる（＝資源の枯渇）

近世末までの自然利用

人口が少なかったので資源を枯渇することはなかったのか？

◎17世紀の沖縄島での森林減少と育成政策（三輪）

交易の縮小（明朝の凋落）と薩摩の支配（石高制への編入）



国内自給経済の確立→羽地仕置・開墾奨励、砂糖増産



耕地面積の拡大、人口増大（2倍）、流通の拡大



森林資源への圧力



+羽地大川での大洪水、丑年の大飢饉
蔡温の林政（森林育成、伐採の禁止）

近世末までの自然利用

人口増加が見られなかった背景には「賢明な」利用があった？

◎八重山での新村建設

18世紀初頭の人口増加、貢納増産

- 新村建設、人口調整
- 明和の大津波による人口減少(+マラリア)
- 地方役人の不正の横行、定額人頭税
- 困窮した農民生活(低い人口増加)、人頭税廃止後、多くの廃村

◎救荒作物としての蘇鉄利用(安溪貴子)

◎物々交換(安溪遊地)

奄美群島

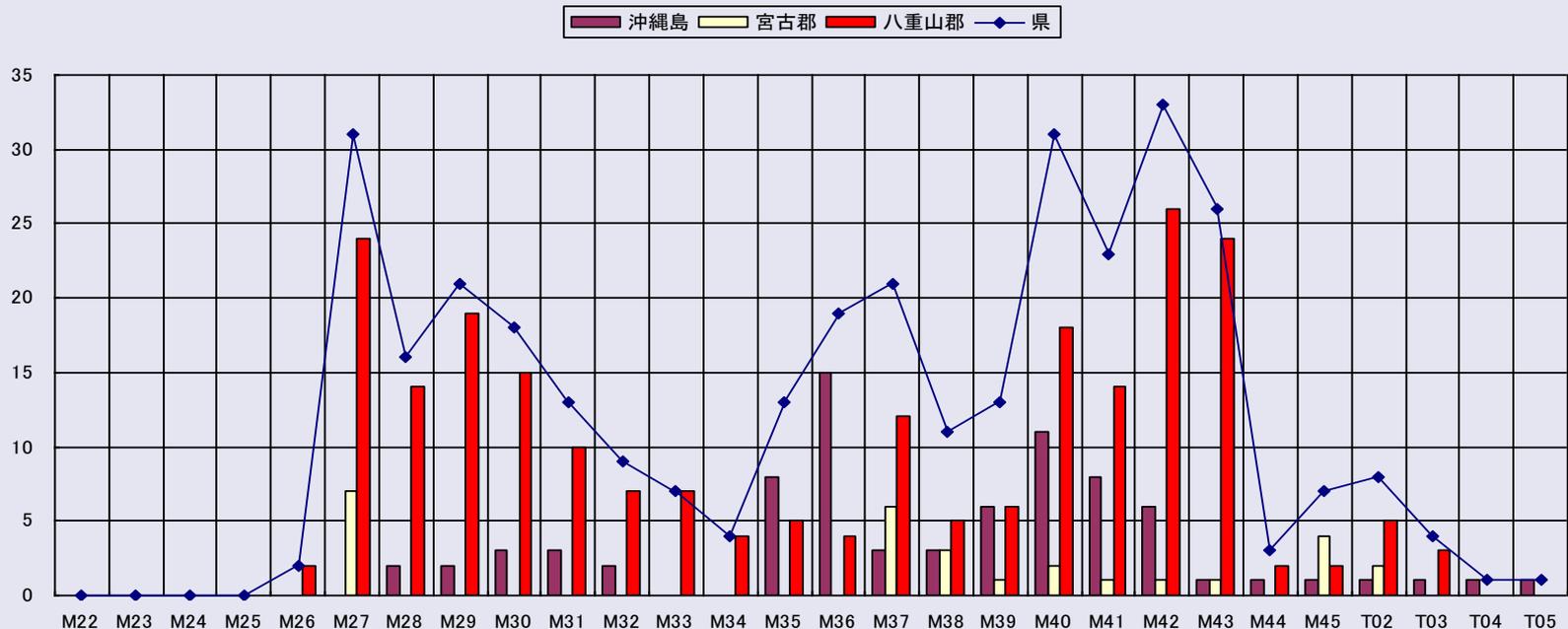
サトウキビのモノカルチャー化(生存基盤の脆弱性)、度重なる飢饉

→「蘇鉄は恩人」

→ヤンチュの発生、不調な物々交換

近代における生業変容と自然環境への影響

◎ジュゴン地域個体群の絶滅(当山)



《八重山地方》

貢納品として新城島民のみ捕獲が許されていた
廃藩置県(十人頭税の廃止)、商品化

1893(明治26)年～1916(大正5)年までの間で二百数十頭を捕獲
→ほぼ絶滅

近代における生業変容と自然環境への影響

◎糸満漁民によるサンゴ礁資源の乱獲(渡久地)

王府時代 釣り漁と採貝目的の潜水漁



M23年頃 廻高網(ム口網、アギヤー)の考案(←水中眼鏡)
=効率的な漁法



サンゴ礁域での漁獲量の減少
(+復帰以降の底魚や底生生物(ウニ)の減少、
赤土流出問題とオニヒトデのサンゴ食害、サンゴの白化減少)

◎イノシシの「持続的な」利用(姥原)

繁殖能力、捕獲技術、商品価値、「獣害対策」の関係性

(西表島) 1943年台湾より跳ね上げ式の脚括り罟技術の普及
→捕獲量の増大

◎人口動態と土地利用の変遷(早石ほか)

近代における生業変容と自然環境への影響

◎聞き書きを手がかりとして

南城市玉城、仲村渠に在住の金城善徳（S9生まれ）さんより、かつての農村の生活について聞き取り調査をおこなった。この中で、この「しま」は稲作が盛んであったこと。稲作のほかにイモが米の補助作物として栽培されていたこと。稲作とならんでサトウキビの栽培がおこなわれていたこと、などを聞き取っていった。特に重要におもわれたのが、狭い土地を有効利用する方法である。この「しま」では、湧水を稲作の水源にしている。この湧水の湧き出し口から流路にそって田んぼが続き、流路からはずれた場所は畑とされた。さらに斜面の石灰岩地は耕作地にはならないため、ウカファ山とよばれた緑肥用のマメ科のクロヨナ林として利用されていた。金城さんの家でいえば、このウカファ山の広さは300坪であったという。この田んぼを中心とした畑、ウカファ山が当時の仲村渠付近の里山構造の中心であり、このほかに製糖期の薪を供給するサーターダムン山と呼ばれる地帯もあった。南部でもこうした里山構造は少しずつ違いがみられたようで、仲村渠あたりには屋根をふくための材料を取るカヤ原は存在しておらず、カヤは大里から買い入れていたという。

（盛口 未発表）

第二次世界大戦以降

急激な都市部での人口増加と地方の人口減少

《検討課題》 主に聞き書きから

戦争(地上戦、空襲)の直接的影響 → 復興のための森林伐採

引き揚げ(日本、台湾) → 一時的に農耕地の拡大

復帰後の復興策の影響 → 道路の建設、農地改良、環境悪化

おわりに

- ・少なくとも6500年以上にわたり沖縄島に継続して定住

(島嶼環境史でみたときの独自性)

先史時代以降オセアニア800の島で8000種の鳥類が絶滅

(Steadman 1995)

- ・「賢明な」利用ばかりではなかった

個体群絶滅、減少、低い人口増加率(近世の150年以上)

- ・近代の人口増加の背景とその影響

- ・自然環境に対する人為影響の記述の仕方